

# 須恵器提瓶再考

小池 寛

## 1. はじめに

考古学の主要な方法論である型式学を概説する際、さまざまな考古学者によって具体的な事例をあげて解説がなされてきた。わが国においては、須恵器提瓶の肩部に付された双耳の形態的な変化が、型式学を解説するうえで典型的な事例としてしばしば、事典や概説書に取り上げられてきた。また、今なお、提瓶は、痕跡器官を説明する際の具体的な事例として取り上げられることが多い。

一方で近年の須恵器研究は、大阪府陶邑古窯址群をはじめとする生産段階での型式学的研究が飛躍的にすすみ、各地に所在する集落址や古墳の時期を比定するうえでの根幹をなしている。また、朝鮮半島での陶質土器研究も進展し、須恵器の器形的な系譜を考察する研究も進んでいる。そのなかにあつて須恵器における型式学的研究の進展は、初期須恵器段階から生産される器形と、やや遅れて生産される器形が存在することを明らかにするとともに、その要因に対する見解も数多く提示されるに到っている。

本稿で取り上げる提瓶は、初期須恵器段階では、生産されない器形であり、6世紀前半に生産がはじまる。本稿では、以上のことを前提として、提瓶に付された双耳の型式学的な変化について再検討することを主たる目的とするとともに、提瓶の系譜と6世紀以降に国内で副葬品として定着する要因について、私見を提示したい。

## 2. 提瓶の型式学的検討

須恵器研究の中で、提瓶に関する見解は、比較的早い段階から提示されている。濱田耕作<sup>(注1)</sup>、小林行雄<sup>(注2)</sup>は、本格的な須恵器研究が始まる以前から、中国の秦漢時代に提瓶と形態的な類似が認められる扁壺が存在することと朝鮮半島南部にも僅かながら類例が認められることをすでに指摘している。また、肩部に付された双耳の型式学的な変化についても、半環状の双耳から角状、そして、瘤状の双耳へと変化する見解が述べられている。

著者は、かつて口縁部が直立する須恵器直口甕の系譜と編年的研究を行うとともに、直口甕の肩部にも半環状、角状、瘤状の双耳が付されることを整理した<sup>(注3)</sup>。その際、副次的にはあるが、提瓶における双耳の変化が、必ずしも半環状から角状、そして、瘤状へと変

化しないことを指摘するとともに、各々の系譜を究明することが、古墳時代後期になって生産される提瓶などの用途や宗教的儀礼のなかでの役割を研究する上で重要であることを論じた。しかし、双耳における型式学的見解は、十分に認知されることなく、現在に到っており、半環状、角状、瘤状へと変化する型式が、無批判に踏襲されている現状がある。

須恵器提瓶は、大阪府陶邑古窯址群の発掘調査によって示された陶邑編年MT15型式並行期に最古資料が確認できる<sup>(注4)</sup>。その後、TK10型式並行期、TK43型式並行期、TK209型式並行期においても生産されていることが確認できる。

基本的な変化として、MT15～TK10型式並行期の提瓶の口縁部は、外反し口縁端部外面を三角形状に突出させる特徴が見られる。この傾向は、突出度が低下するもののTK43型式並行期でも確認できる。しかし、TK43型式並行期の提瓶には、その後に見られるように口縁部が直線的に開き、三角形状の突出部が形骸化した口縁端部を有する個体も共存していることがうかがわれる。一方、TK209型式並行期に見られる提瓶の口縁部外面には、三角形状の突出部が稜線化した状況がうかがえる。また、同じTK209型式並行期の提瓶の口縁部は、稜線などの装飾も見られず、直線的に立ち上がる個体も共存している。

提瓶の器高および胴体部の最大径は、全体的に徐々に小型化しているが、製作技法的には体部外面に正円形の轆轤回転によるカキメなどの成形痕が、TK209型式並行期までうかがえることから、小型化が進んでもそれらの技法は、踏襲されていることが確認できる。

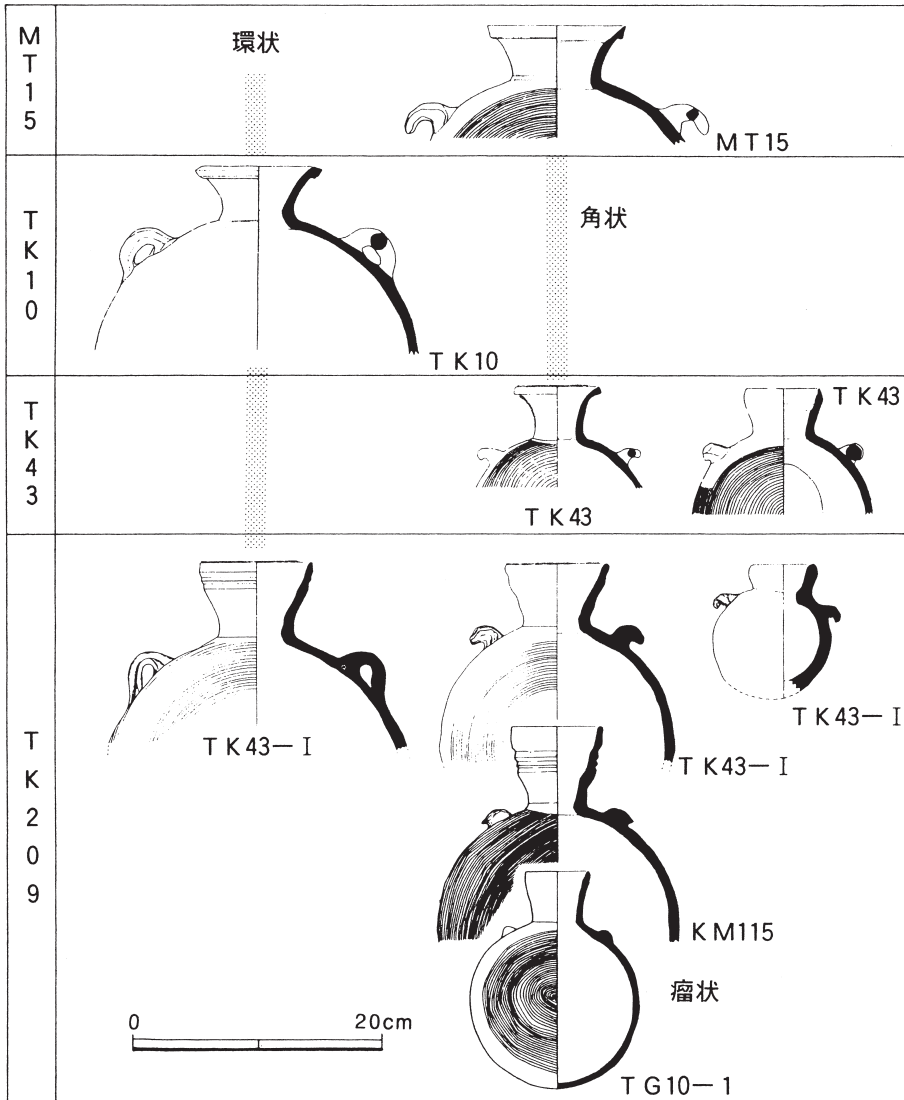
さて、本稿の主題である肩部に付された双耳について検討を加えたい。

先に述べたように、かつて型式学を国内の遺物において論じる際、その典型例として提瓶の双耳がしばしば取り上げられた。また、現在でも事典や概説書、展示図録においてもその見解は踏襲されており、それらの見解は、まさに定説化した感が否めない。

肩部の双耳については、従来から半環状の双耳から角状、そして、瘤状の双耳へと変化すると理解されてきた。仮にその見解が正しいのであれば、提瓶が出現するMT15型式並行期には、半環状の双耳のみが出現し、角状の双耳は、少なくとも次型式において出現していなければならない。しかし、現実的に大阪府陶邑古窯址群のMT15型式並行期には、同時に生産されていることがわかる。一方、本来、先行すべき半環状の双耳は、ほとんど形骸化することなく、TK43～TK209型式並行期まで存続することが確認できる。

一方、MT15型式並行期に出現する角状の双耳は、TK43型式並行期には、角部自体が短くなるなどの形骸化がみられ、全体的な小型化はさらに進む。また、TK209型式並行期では、さらに痕跡器官化が進行していることがわかる。同型式に比定できる大阪府陶邑古窯址群KM115号窯の提瓶では、さらに、形骸化がすすみ、陶邑古窯址群TG10号窯例では、瘤状の双耳へと完全に変化していることが把握できる。

以上から、半環状の双耳は、提瓶が生産され始める時期から肩部に付される。しかし、全体的に小型化するもののTK209型式並行期に到るまで、痕跡器官化することなく機能していることがうかがえる。その反面、角状の双耳は、やはり半環状の双耳が付される提瓶と同じく初源期からみられるものの、その後、確実に形骸化が進行し、最終的には瘤状に到る型式変化を把握することができる。また、瘤状の双耳が、形骸化が進む角状の双耳に先行して出現することはないことから、角状の双耳が形骸化し、瘤状の双耳へと徐々に変化していく過程を、提瓶の型式編年の中でも認識できるのである。



第1図 大阪府陶邑古窯址群における提瓶の編年 (注3)より転載

本来、半環状の双耳の一方を肩部から切り離して角状の双耳へと形骸化するとした見解は、一見すると蓋然性が高いように思われるが、機能的な側面から考えた場合、そのような形骸化は極めて不自然である。

以上の事実確認から半環状の双耳から角状の双耳への型式学的な変化は、首肯することはできず、同じ提瓶ではあるが、双耳の系譜などの違いを今までの研究史の道筋以外で検討する必要が生じるのである。

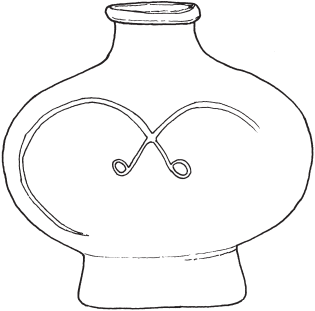
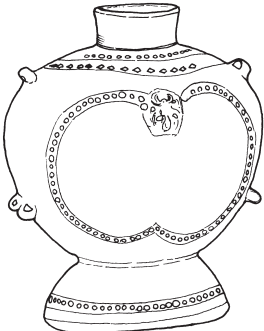
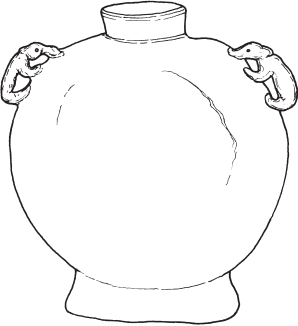
### 3. 須恵器提瓶の系譜

提瓶が、その形態から液体を携行するために生産された容器であることは、ほぼ、間違いのない事実と思われる。ここでは、その系譜について東アジアの中で捉えておきたい。

提瓶と形態的に酷似する文物として中国の戦国時代から漢代にかけて製造される青銅器扁壺<sup>(注5)</sup>がある。胴体部の最上部にやや外反する口縁部を有し、底部には短い脚が付く。また、肩部に青銅製の円環が付けられている事例が多くみられる。青銅器扁壺が、酒器として使途されていたことを示す文物として画像磚をあげることができる。

中国の秦代、漢代の漢景帝などから出土している押型対座宴楽空磚は、漆喰の壁などにはめ込まれた敷磚であり、主人と客人の宴の様子を描いている。主人の傍らには、双耳にかけられた紐を有する扁壺が描かれており、酒器として使用されていたことを示している<sup>(注6)</sup>。

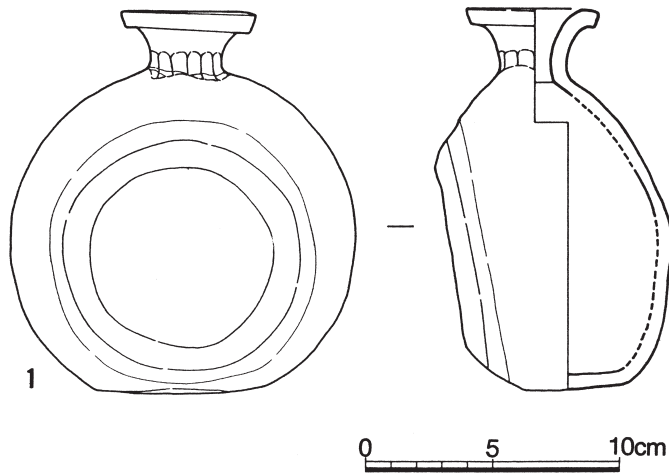
このように扁壺は、元来、青銅器の酒器として生成されていたと考えられる。しかし、青銅器の扁壺が祖形となり、いわゆる金属器の模倣によりすでに漢代の灰陶にも扁壺が見られるようになる。中国遼寧省旅大市老鉄山西麓貝墓から出土した灰陶扁壺<sup>(注7)</sup>は、器高12.4cmを測り、扁平な胴体部の最上部に口縁部を有し、底部には短い脚が付く。しかし、扁壺の特徴である双耳は見られない。青銅器扁壺とは全体的な形態などで大きく異なる部分もあるが、基本的な概念として、青銅器扁壺が祖形となっていることは、首肯して良い状況である。一方、中国魏晉南北朝、西晋時代の事例として江蘇省南京市張家庫前頭山出土の青磁扁壺<sup>(注8)</sup>をあげることができる。胴体部の側面形態が正円ではなく、やや肩部が張った胴体部に直口する口縁部と脚が付く。最も特徴的な要素として、肩部と底部近くの四カ所に双耳が付けられている点をあげることができる。このことから、同扁壺は、吊り下げられることを最大の用途として生産されたと考えられる。また、同じ中国魏晉南北朝、西晋時代の事例として江蘇省金壇県白塔公社から出土した青磁扁壺<sup>(注9)</sup>は、器高23.2cmを測り、胴体部に直口する口縁部と底部に脚が付く。特に、肩部に象と思しき獣形の双耳が付されており、同時代に盛行する動物をモチーフとする造形の範疇で捉えることができる。元来、半環状を呈していた肩部の双耳は、当該時期についてのみ、獣形に変化したと推測できる。

<p>漢代・灰釉扁壺</p>		<p>1 遼寧省旅大市老鉄山西麓貝墓 器高：12.4cm</p> <p>2 江蘇省南京市張家庫前頭山 器高：25.5cm</p> <p>3 江蘇省金壇県白塔公社 器高：23.2cm</p>
<p>魏晉南北朝・青磁扁壺</p>		

第2図 中国における扁壺集成

次に、朝鮮半島における事例についてみておきたい。慶尚南道金海群大東面禮安里詩禮部落に位置する禮安里30号墳は、全長210cm、石室幅155cmの横口式方形石室墓に分類されており、複数回の追葬が堆積状況と出土遺物から確認できる。出土した扁壺の出土状況については、「北隅の石室最下部直下に置かれ、人骨群に覆われていた。本墳から出土した他の遺物よりも先行して埋納された可能性が非常に高い遺物である。」と取えて副葬された時期が、最も古い事実を記述している。

さて、禮安里30号墳は、方形に近い石室プランを有していることと、共伴する印花文細頸壺の出土から7世紀前半に比定されている。確かに、共伴する印花文を有する蓋や鉢の形態や文様から考えると、到底6世紀前半まで遡ることはできない状況である。しかし、30号墳は、小石室である79号墓や木棺直葬墓である74号墓、111号墓を切り込んで構築されていることから、先行して造営され、30号墳の石室床面に残存した他の埋葬施設の副葬品を30号墳の床面出土遺物として石室内で取り上げた可能性が指摘できる。これは、先に訳出した出土状況に取えて先行して埋納されたことを示す一文の内容と合致する。また、副葬品として出土した鉄斧の型式が、野島編年2式(注11)に分類することができる。これらのこ



第3図 韓国禮安里30号墳出土扁壺

とから、30号墳出土の陶質土器扁壺は、従来考えられてきた年代を7世紀とするのではなく、少なくとも、5世紀後半から6世紀に比定すべきではないかと考えられる。

なお、製作技法については、以下の所見が見られる。「口縁部は、大きく欠損しており、

焼成良好な陶質製品である。正面形態は円形、側面形態は縦楕円形の胴体部を有する。当該扁壺は、立位と横位のために2箇所の底部がある。横位のための底部は、胴体部の片側に円板状の底部を付けて、周縁を横方向のへら削り調整を施している。口縁部は、胴体部の上方からラッパ状に開いており、口縁端部に近いほど外反している。口縁端部は、多少凹気味であり、口縁端部の内側には平坦面を有している。口縁部と胴体部の境には、口縁部を製作する際の粘土接合痕を消したうえ、縦方向の短いへら削り調整を行っている。」

以上の記述には、須恵器提瓶で見られるような胴体部の同心円状のカキメについての所見は記されていないが、遺物写真を見る限り、胴体部に回転するカキメが不明瞭ながら観察できることから、製作技法は、須恵器提瓶に共通する可能性が指摘できる。なお、肩部には双耳が付されていない。

以上、中国及び朝鮮半島における事例について概観した。まず、中国における扁壺は、戦国時代から漢代の青銅器に見られ、画像磚などから酒器であったことが把握できた。この青銅器を模倣して漢代の灰陶に扁壺が見られるようになる。さらに、中国魏晋南北朝、西晋時代の青磁扁壺へと継承されたことが形態的にも首肯できる状況にある。

一方、朝鮮半島での類例は僅かであるが、慶尚南道金海群禮安里30号墳から陶質土器扁壺の出土が確認できた。当該扁壺は、従来7世紀に比定されてきた土器であり、須恵器提瓶の祖形にはならない状況であったが、共伴遺物などから、少なくとも須恵器提瓶よりは遡る可能性があり、須恵器提瓶の祖形の一候補となることを想定することができる。

#### 4. 双耳に関する検討

扁壺は、中国の青銅器に起源を有し、金属器の模倣が中国漢代には行われ、灰陶の酒器として朝鮮半島に伝えられたと考えられる。また、その系譜上に須恵器の提瓶が存在することを推定したが、肩部の双耳については、同様の系譜上にないことが考えられる。

中国では、獣形の双耳も見られるものの、環状ないし半環状の双耳が一般的に採用されていることが指摘できる。朝鮮半島では、現時点では事例がないものの、須恵器提瓶には、出現期から半環状の双耳があることから、東アジアの中で半環状の双耳を捉えることができる。しかし、角状の双耳は、東アジアには見られないことから、日本国内における提瓶の製作段階において付された可能性が指摘できる。須恵器直口甕にも、提瓶と同じような双耳ないしは四耳が付くことは、すでに検証したが、提瓶が出現する陶邑編年TK10型式並行期に比定できる高蔵74号窯において角状の双耳を確認することができる。<sup>(注12)</sup>直口甕の双耳ないし四耳は、口縁部を覆う木板などの蓋を固定する用途が想定でき、提瓶の双耳とは明らかに用途が異なっている。しかし、当該期の一部の横瓶にも、双耳が付された事例があることから、双耳自体は、必ずしも提瓶にのみ付されたのではなく、吊り下げたり蓋を固定する必要がある器形に幅広く採用された可能性が指摘できるのである。

このように半環状の双耳は、その系譜を東アジアに求めることができるが、角状の双耳には、須恵器の製作工人により元来、他の器形に付けられていた双耳を提瓶にも付したと考えられる。その系譜の違いから、半環状の双耳と角状・瘤状の双耳は、同時に併存し、角状の双耳は、形骸化のなかで瘤状の双耳へと変化する過程が辿れると解釈できるのである。<sup>(注13)</sup>

#### 5. まとめにかえて

古墳時代前期から終末期の墓制は、その時代毎に異なっていることが多くの発掘調査によって明らかになっている。それは、各々の時代の社会構造や権力構造の変化に起因しており、ヤマト政権を中心に各地域の地域首長のあり方や支配構造が変化したことを示している。

古墳時代後期には、朝鮮半島からの渡来系技術者集団の集落内の参入により、中期にみられたような地域首長を介した支配構造は崩壊し、ヤマト政権による各集団の直接的支配へと変化する。それに伴い墓制も大きく変化し、具体的には陶邑編年MT15～TK10型式並行期には、横穴式石室の築造が全国的に拡散することになる。<sup>(注14)</sup>また、それにより黄泉戸喫などの葬送儀礼が執行され、それに供される須恵器の多量副葬化へと繋がっていく。ここで取り上げた提瓶は、横穴式石室から通有に出土する副葬品であるが、各石室から複数

の提瓶が出土する事例は、さほど多くない傾向が認められる。これは、中国や朝鮮半島において酒器として使用された扁壺の影響を受けたことによる用途の継承であり、葬送儀礼のなかでの儀礼的飲酒にかかわる酒器として、提瓶が採用されたことを示している。元来、陶器編年MT15～TK10型式並行期の提瓶は、容量の点においても実用な要素を有しているが、須恵器壺がそうであるように、その後は葬送儀礼自体の儀式化にともない、小型化が進み、実用器としてよりは、明器としての位置づけがより明確になったと考えられる。そのため、提瓶の双耳の形骸化が角状から瘤状へと急激に進行したのであろう。

本稿において提瓶の双耳が半環状から角状へと形骸化する過程については、ほぼ否定できる状況にあることを証したと思う。また、6世紀に葬送儀礼に多用された提瓶には、酒器としての用途を有していたことが、中国などの青銅器や灰陶研究から把握することができたと思う。文末ではあるが、本拙稿が、須恵器の系譜研究の進展に寄与するところがあれば、望外の喜びとしたい。

(こいけ・ひろし = 当調査研究センター調査第2課課長補佐兼第1係長)

- 注1 濱田耕作「提瓶に就いて」(『東亜考古学研究』)1930
- 注2 小林行雄「提瓶」(『図解考古学辞典』東京創元社)1959
- 注3 小池寛「須恵器・直口甕の基礎的検討」(『京都府埋蔵文化財情報』第65号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1997
- 注4 『陶器古窯址群』I 平安学園考古学クラブ 1966
- 注5 金関恕「資料解説銀錯羽状獣文地おう」(『ひとものこころ 天理大学附属天理参考館像品殷周の文物』天理参考館)1986
- 注6 近江昌司「資料解説押型対座宴楽空罍」(『ひとものこころ 天理大学附属天理参考館像品画像罍』天理参考館)1986
- 注7 佐藤雅彦「漢代の陶磁」(『世界陶磁全集』10 小学館)1982
- 注8 長谷部楽爾「魏晋南北朝の陶磁」(『世界陶磁全集』10 小学館)1982
- 注9 注8に同じ
- 注10 金玉年「(33)30号墳」(『釜山大學校博物館遺蹟調査報告』第8輯 金海禮安里古墳群 I 釜山大學校博物館)1985
- 注11 野島永「古墳時代の有肩鉄斧をめぐって」(『考古学研究』第164号 考古学研究会)1995
- 注12 注3に同じ
- 注13 小池寛「須恵器・直口甕の系譜について」(『京都府埋蔵文化財情報』第66号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1997
- 注14 森岡秀人「群集墳の形成」(『古代を考える 古墳』吉川弘文館)1989